IS　漆黒の突風

冬月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　漆黒の突風

【Ｎコード】
Ｎ６１２７Ｘ

【作者名】
冬月

【あらすじ】
ＩＳに乗るためだけに生まれた存在、御門遊馬は、過ちを繰り返さない為に平行世界へ飛ぶ。が、この世界何かがおかしいぞ。なぜ初のＩＳが反応した男が二人もいるの？
だんだんとオリジナル展開に進むと思います。

00－a　旅立ち

とある研究室で、俺はただ目の前の女性の作業を見ていた。
今となって、なぜ自分が彼女に協力しようと思ったのは、正直わからない。元々勘で動くタイプではあったから、今回もそんな感じだと思う。
……いや、本当はそれらしきものに心当たりはある。一般的にいう、恩返し、というのが一番近いのかもしれない。実感が伴わないためなんとも言えないのだが。
やり直しのチャンスをもらったと言って良いのかどうかわからないが、そうとも言える気がする。

「あっくん。準備できたよ」
ようやく終わったようだ。彼女の仕事はここまで。これから先が、俺の仕事だ。
「……あっくん。最後に教えて。何で協力してくれるって言ったの？」
だからなんとなくだ、といつものように返す。
「嘘だよね。だってあっくんは、まだ私を恨んでるでしょ？」
そんなもの、とっくの昔に燃えるごみの日に処分したさ。あれ、不燃ごみの日だったか？
「やっぱり、そういう所は似てるね。あっくんと■■■■は」
知らん。俺はその■■■■とは直接あったことは無い。そいつが居たから、俺が生まれたのだが。
「実際に会えるんだよ。これから」
「会ったとしても、なに話せばいいんだか。別に産みの親って訳でもねぇしな」
「そうだよね……」
会話は、そこで途切れた。

用意された装置に腰を掛ける。たった数日居ただけの研究室なのに、二度と帰ってこないと思うと寂しさを感じる。これが郷愁の念というやつなのかはわからない。こちらに二度と戻ってこられないから、寂しく思うのかもしれない。

「じゃあ、あとはお願いね。押し付けるみたいになっちゃったけど」

「気にしなくていい。どうせ、この世界に居場所はない。俺も、あんたも、ね」　皮肉なものだ。この世界を作った本人が、世界から弾き出されたのだ。

「だから、次はあんたも、胸はって生きれる世界にしてくるよ」

そう。この世界の彼女では無理でも、別の世界でなら……。というが今回の作戦での俺の持論だ。そして、俺のような存在が生まれないようにしなければならない。

「違うでしょ。本当の目的は、こんな世界にならないようにする、でしょ？」

「ついでだ。ついでにそこまでやってやるって言ってんの」

乾いた笑みを浮かべられる。呆れられたかな。でもこれ決定事項だから。

「じゃあ、お願いしちゃおうかな」

「任せとけ。だからあんたも……」

あえて、そのあとは言わない。言わなくとも

「ありがとう。あっくん」

目に涙を浮かべながら、今までで凍りついてしまった表情になんとか笑みを作って、彼女は、俺を“跳ばした”。

「ありがとうあっくん。せめて、あなたの行く先で、過ちが起きませんことを」

旅立った彼を思い、彼女は徹夜続きで重くなった瞼を閉じた。

装置作動と同時に、からだの感覚が一気になくなる。浮遊感というか無重力感というか。

そこに、まるで自分の肉体から、魂か何かが引き剥がされるような、捻りきられるような、時空の渦に揉まれる。

ちょ、これ、予想以上に厳し……っと。

目の前に光が溢れる穴が見えだした。あれがゴールということか。

「いっちょカマすか」

猪突猛進野郎と謳われた（？）俺の本領発揮の場と、勝手に判断。

「行くぜぇ！　ノワール！」

俺の愛機であるＩＳ、“漆黒の突風（インフィニット・ラウラアトル・ノワール）”を起動し、光へと一気に駆け抜けた。

００－ａ　　旅立ち（後書き）

どうぞよろしくお願いします

ちなみにオリＩＳ　ですが、仏日辞書には、ラファール［ｒａｆａｌｅ］＝突風とありましたので、疾風ではなく突風と訳してます。

００－ｂ　婚期って大事ですよ

ＩＳ――――正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかったが、「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして、開発が進められるようになった。

ビーム兵器の搭載、シールドエネルギーによるバリアーや“絶対防御”、ハイパーセンサーの搭載と、従来の兵器を大きく上回り、新たな抑止力となったＩＳも、欠点があった。

女性しか操縦できない。この為、世界は男尊女卑ならぬ女尊男卑となる傾向にあった。そして、ＩＳの中枢となる核――――コアは、４６７個しかない。そのため、先進国と途上国との格差が広がったといっても良いかもしれない。

「といった所か」

俺の名は御門遊馬。先日俺のことを“あっくん”と呼ぶ女性に、“こちらの世界”に飛ばされてきた人その者ですハイ。

要するに、俺こっちの世界の人間じゃありません。

「事情は分かったが、どうするのだ、お前は？」

読みあさっていた新聞をひとまず置いて、机を挟んで向かいに座る女性を見る。目の前にいるのは、かつてブリュンヒルデと謳われた女性、織斑千冬。

俺はラファール・ノワールであのトンネルを越えた後、ＩＳ学園にあるアリーナにたどり着いた。いや、正確には墜落したというか、降ってきたというか……

「突き刺さっていた、だろうな」

ですよねー。まさか真っ逆さまに突っ込んでいたなんて気がつかなかったもん。グラウンド見えてコンマ５秒で激突だよ。ひどくね？
「しかし、いささか信じられないな。平行世界から来たというのは」
「でも、俺のＩＳのコアナンバーが、こちらにあるコアのひとつと被っていたのだから、信じてもらえませんかね」
俺が“突き刺さって”から、千冬さん他数名の職員に拘束されて、ＩＳも解析のため没収された。とりあえず俺は、“異世界の二人目のＩＳ適合者の男性”で、新型ＩＳの起動実験中に暴走事故が起こり、鎮圧するための戦闘中にアクシデントがあった、そのため、気がついたらここに来ていた、ということにした。
いやね、本当のこと言ったら絶対に信じてもらえないだろうし。我が輩はそこまで愚かではないのだよ。口から出任せなどいくらでもしてやろうぞ。
「とりあえず、貴様がほとんどのことを隠しているのは分かったが、やはり学園で監視することになると思うぞ」
な、んだと……？　俺の嘘に気がついている、だと！っと、ゲフンゲフン。やっぱそうなりますか。その方がこちらも都合が……もとい落ち着ける場所が出来て助かりまぅ。
「フン。食えない奴だな。そういう奴は嫌いではない」
そういって貰って光栄です。ただ、その敵意むき出しの視線はやめてくださいよ。婚期を逃しますよ。
「余計なお世話だ」
ちなみに、俺がいた世界の千冬さんは、面識はありませんでしたが、完全に逃したらしいです。
「な、んだと……」
でもきっと大丈夫ですよー。今からでも遅くはありませんからヘブッ！
「と、とにかく私は学園側での貴様の扱いについて報告しなければならない。大人しくしていろ」
「イエス、マム」

渾身の右ストレートでした。とりあえず了承しておいたが、なんか、どよーんって感じの後ろ姿だった。やっぱ気にしてはいたのかな。結婚とか。

とりあえず、どうせＩＳ学園に入学して、３年間ウハウハ……いやいや、ムフムフ……ゲフンゲフン。若い女子に囲まれて生活するのか。

前の世界は、元々人の数自体少なくなってたし。

暇なので、こちらの世界の情報を知りたいと持ってきて貰った新聞を眺める。

日にちを遡るようにぽつぽつと読んでいると、とある日にちで、一面に“世界初の男性ＩＳ適合者現る！”と書いてある記事を見付けた……って、え？

何で写真に２人も写ってるの？

01　男子三人の受難

結局、俺の身柄は学園で保護という名の監視下におかれることになった。

どのみち俺の中ではこうなる予定であったので、結果オーライだ。今は学園にある職員寮の、来賓用の個室を借りている。新学期が始まれば、学生寮に移されるとのことらしい。

ちなみに俺は、日本にあるＩＳに携わる企業、倉持技研のテストパイロットということになった。世間に公表されなかったのは、きぎょーひみつという名の大人の事情のためとのことに。しかも俺は専用器も持っていたから、データの提供を条件に収入を貰えるという、要するに実際に雇用された。

これも千冬さん他学園の教員の方々の尽力のおかげなのだ。感謝しないとなぁ（棒読み）

しかし女子（おなご）まみれの生活かぁ。いやぁ、楽しみだなぁ。

そんな浮かれたことを思いながら、暇潰しに買ってきた本を読みながら過ごしていた。

とても浅はかでした。昨日までの自分にバックドロップを決めてやりたい。

入学式を終えて一年一組の教室に入るが、なんというか、視線が

集まる集まる。
　このクラスに男子を集めたようで、しかもその三人がバラバラに座っているから、視線が三点に集中している。
　副担任を名乗る山田真耶先生が入ってきても、その状況は全く変わらず。これが人の好奇心というものなのか。なにこれ怖い。

「織斑くん。織斑一夏くん！」
「は、はい！」
　山田先生が出した大声で、ようやく気がついた男子が、勢いよく立ち上がった。自己紹介の順番が回ってきただけなのに、そこまで慌てる必要はないだろう。
「えっと、織斑一夏です」
　……周りの視線が『もっと言え』と、凄まじいプレッシャーを与えているのがわかる。ん、ちょっと待てよ。これ、俺の番でもくるんじゃね？
　そんなことを思っていたら、一夏が大きく深呼吸をした。周りの緊張はさらに上がる。なんというか、まじ怖いです。
「以上です！」
　クラスの女子の半分がずっこけた。ノリいいなぁおい。
　と思っていたら、一夏の頭に何かが振り下ろされた。なんかすごい音したんだけど。一撃必殺ってああいうのを言うのですかね。
「自己紹介もまともに出来んのか、お前は」
「げっ関羽！」
「誰が三国時代の英雄か」
　二発目の衝撃が一夏の頭を襲う。あ、あれ出席簿なんだ。鉛でコーティングされたとしか思えない威力なんですけど。
「ち、千冬姉！？」ズガン！
「学園では織斑先生と呼べ」
「はい……」
　こんなんで大丈夫なのか？俺のはじめての学園生活は……。

「さて、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にするのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、理解しろ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け」
なんというか、聞いていた通りの暴君だな。教師としてさっきの発言は問題ないのか？まぁＩＳが兵器だというのはこの世界で藻同じだから、厳しい方がいいのか？
何てことを考えていると、
「キャー！千冬様ー！」
「憧れの千冬様が目の前に！」
「私、もう死んでもいい！」
……耳が、耳がぁぁぁぁ！
狭い教室のなかで、人間の黄色い声だけでここまでの爆音になるなんて……。そしてさっき死んでもいって言ったやつ、命は大切に！
織斑先生と山田先生はすでに耳を塞いでいる。こいつら、こうなることを予想してたな。
「毎年なぜこうもバカばかり集まるのだ。それとも私に押し付けているのか？」
あー、毎年これか。なんというか、ご愁傷さまです。
でもさっきから、もっと言ってーとか、躾してーとか、たまには優しくしてーとか、結局騒ぎになる始末。
こんなんで良いのか、この学園。

その後、一夏と織斑先生とのやり取りで、二人が姉弟だと判明し、また喧しくなる。
ちなみに一夏はこの世の終わりのような顔をしている。もう一人の男子も織斑先生と面識があるためか、げんなりとした表情を浮かべている。まぁ、気持ちは分からなくもないけど。
で、自己紹介が再開し、もう一人の男の番になった。
「五反田弾です。一夏とは中学からの付き合いで、実家は定食屋をしています。そのうち食べに来てください」

うん、無難。赤い長めの髪をバンダナで上げた、長身の男だ　。顔からアホっぽい雰囲気が出てるのは気のせいでは無いだろうか？
そんな感じで次俺の番。
「御門遊馬です。倉持技研のテストパイロットやってます。ニュースにならなかったのはおとなのじじょーらしいです。一年間よろしく」
よし、無難な感じで終わったはずだ。
「長い黒髪にメガネ。三人とも個性的ね」
「これは織斑×御門、もしくは五反田×御門かしら」
「いいえ、以外と御門くんが攻めかも」　あぁ、なんか耳が腐りそうな会話が……。やめてくれ俺に薔薇の趣味はない。
ちなみに俺の容姿だが、前は目元が隠れるくらい、後ろは肩まである黒髪で、眼鏡をしている。あ、これ伊達ね。オサレメガネと考えてもらけばいいさ。身長は平均くらい。体つきは良い方だと思うよ。鍛えさせられたし。

自己紹介のあと、早速授業に入ったが、一夏と弾が参考書を捨てたとのことで、再び出席簿が火を吹いた。
なんつうか、一夏見てると、かなり、あれだ。
イライラする。

「御門遊馬だっけ」
休み時間に、一夏と弾に話しかけられた。二人とも、女子からの視線にげんなりしている様子だ。気持ちはわかる。俺だって逃げ出したい。

「遊馬でいい」
「そっか。俺も一夏でいい」
「俺は弾だ。ヨロシク」
軽く挨拶しあっていると、一夏は一人の女子に声をかけられて、出ていった。弾の影になって見えなかったが、あれは……。篠ノ之箒さん、かな。たしか一夏と幼馴染みという話だったはず。
「どした、遊馬。なんか寂しそうな顔してるぞ」
「え、いや。なんでもない」
弾に心のなかを見透かされた気がして、笑ってごまかした。
「そか。しかし、こうも視線がきついと、なんか入って失敗したっていう気分になるな」
「わかる。期待していたかつての俺に全力で待ったをかけたいな」
おお、意見が一致した。
まさに、おお同志よ！　といわんばかりに固い握手をかわす。こいつとは仲良くやれそうな気がするぞ。

二時間目が終わり、休み時間を寝て過ごそうとしていると、何やら一夏と弾に、金髪ロール女史が絡んでいたが、巻き込まれたくないから見てない振り。
でもそのあと、結局絡まれるはめになったのはお約束なのかなぁ……。

０１　男子三人の受難（後書き）

まだ序盤なので早く戦闘とか書きたい。
だんだんと長くしていく予定

次話予告
男子たった三人の学園生活。
挑発、憤慨、飛び交う敵意。
「決闘ですわ！」
次話『野郎を舐めるなよ』

02　決闘とか……なんで？

二時間目の開始とともに、織斑先生の放った一言が発端だった。
「授業をはじめる前に、再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」
クラスの半分が、クラス対抗戦、何ソレ？　的な顔をしている。
要するに、各クラスから代表者を１人選抜して、対抗戦を行うとのことだ。この代表者は、生徒会の開く会議や委員会の出席等の、クラス長のような仕事もしなければならない。しかも通年で、基本的に変更は効かないとのこと。
ちなみに入学当初に対抗戦を行う意図は、入学時点での各クラスの実力を測ることらしい。おそらく各クラスの代表候補生が務めるだろうから、ＩＳ操縦の経験値の少ない生徒に、生で試合を見せるという趣旨もあるんじゃないかと踏んでいるが。
ぶっちゃけ面倒くさいことこの上無さそう、というのが全員の見解であるはずだ、うん。もちろん俺だってやりたくないＳＡ！
だがしかし、現実は非常なり。自薦他薦を問わないとの発言に、クラスメートが食いつかない訳がない。
「はい、織斑君を推薦します！」
「私は五反田君を！」
「じゃあ私は御門君を推薦します！」
出たー！　しかも『じゃあ』って……。ついでか俺は？
「ちょ、俺！」
「いやいやいやいや、ちょっと待って！」
一夏と弾は慌てた様子で一生懸命に拒否しているが、そんなもの通じるはずはなく、
「候補者に拒否権はない。大人しくしていろ」
と、般若千冬様のお叱りがぅおっと！
「御門、避けるとは生意気だな。それに今失礼なこと考えただろう

？」
「イエソンナコトハマッタクナイデツヨ？」
この人……読心術でも使えるのか？　しかもチョークをこめかみすれすれに投げるって、人間業じゃねぇよ。あれか、これが世界最強の称号を持つ人の力か？
「待ってください、納得がいきませんわ！」

いきなり抗議の声が上がった。挙げた人物は、金髪ロールの……セシリア・オルコットだ。
「男がクラス代表だなんて、良い恥さらしですわ！　このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？　物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！」
あぁ、何というか尤もッぽいことを言ってる。まぁ仮にも代表候補生だからね。そこらへん、ちゃんと考えて
「実力からして私が代表候補生となることは必至。私はＩＳ技術の修練のためにこのような島国に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ありません。大体文化としても後進的な国で暮らさなければならない事自体、私にとっては耐え難い苦痛で――――」
「イギリスだって大してお国自慢無いだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」
なんかベクトルがずれていって……ってちょっと一夏さん何をおっしゃってるん？
「そんなに嫌なら帰れば良いだろうが」
弾さーん？　あなたもどうしましたか、一夏さんのアホにあてられましたか？　しかも2人ともやっちまったみたいな顔してるし。
「あ、あなた達、私の祖国を侮辱しますの！？」
しゃあねぇ、助け船ぐらい出してやるか。
「まぁ、代表候補生の発言ではないよなぁ」
「何ですのあなたは？」
やっぱ標的は俺に向いてきた。むっちゃにらんでるーめんどくせ

ー。
「所詮代表候補生だけど、仮にもイギリスって看板背負ってるんだ。軽率な発言はしない方が良いんじゃねぇの？」
ハッとした様子で、しかしすぐにこっちを睨みつけてくる。自分のミスに気がついたか。でもなぁ、代表候補生なんだから気がつけよねぇそれくらい。
「そうですわね。確かに先ほどの発言は軽率でした。しかし、所詮代表候補生とは聞き捨てなりませんわ」
「そういうのは代表になってから言えや」
ひとつの国に何人の候補生がいると思ってるんだこいつは。

クラスの面々がぽかーんと、俺たちのやりとりを聞いている中で、織斑先生が口を開いた。
「では、実力をはっきりさせようではないか。織斑一夏、五反田弾、御門遊馬、セシリア・オルコットの４人の決闘で決めようではないか」
「良いでしょう、それで」
「良いぜ、わかりやすくて」
セシリアと一夏が同意し、俺も弾も頷く。俺はもちろん嫌々だけど。だってめんどくさいじゃむ。
「では、話は纏まったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。各人はそれぞれ準備をしておくように。では授業を開始する」
手を打って織斑先生が話を締めた。

昼食時、一夏に誘われて、俺、一夏、弾、箒の４人で食堂に来ていた。この学校は世界各国から学生が来ているから、食堂でも多くの国の料理が備えてあるのだ。とりあえず一夏と弾は日替わり定食、箒はかけそば、俺は牛丼を頼んだ。
「しかし一夏、本当に勝てるのか？　搭乗経験の薄いお前や弾では、

勝ち目が薄いのでは？」
「「教えてくださいお願いします箒様！！」」
「頭下げるの早いなおい！」
一夏と弾が一挙に頭を下げた。だよなぁあれだけ啖呵を切っておいて、自信は無いよなぁ。
「私は別に構わないが……御門、お前はテストパイロットやってるんだろ？　お前が教えたらどうだ？」
「嫌だよ何で野郎なんかに教えなきゃならねぇんだよ」
「「ちょ、ひでぇ！！」」
嫌なものは嫌なんだ。特に一夏とか一夏とか一夏とか。
「なんか、一方的な悪意を感じた気が」
「気のせいだ」
おう、姉が持つ読心術の欠片がこいつにもあるのか？
「ところで、一夏と五反田のＩＳはどうなるんだ？」
「弾で良いよ。そりゃ俺も思ったんだが、やっぱ訓練機でやるのか？」
「いや、専用機が支給されるはずだ」
「え、そうなのか？」
俺の発言に一夏が反応する。
「言い方は悪いけどさ、お前らは貴重なサンプルだからな。データ収集しなけりゃならないだろ」
そういうと、箒は嫌な顔をするが、一夏と弾はポカンとしている。
「そのうち連絡が来ると思うぞ。あとで俺も倉持技研に連絡を取ってみる」
以前倉持を訪れたとき、とある（・・・）機体に技術者が全員かかりっきりになっていた。おそらくそれがどちらかの機体であろう。
そんな感じで、４人でまったりと食事を堪能したが、さて決闘はどうなるのかな、と。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6127x/

IS　漆黒の突風

2011年10月23日16時38分発行